

嵐の夜、白い枝

カチカチチーズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

—— 知識とは力だ、知識とは武器だ、知識とは暴力だ。

四人目の古い神殺しの話をしよう。他でもない日本に生まれた羅刹王。

人付き合いが嫌いな癖に、放っておいてる内に面倒事になって持ち込まれたくないから人付き合いをするような、自称学者的な男の話だ。

目次

| | |
|---------------|----|
| 火の炉、知恵の瞳 | 1 |
| 贅の太陽、泉の瞳 | 11 |
| 帰路の談笑、不穩の前触れ | 20 |
| 面倒の前触れ、白鳥の翼 | 25 |
| 『蛇』の神獣、戦乙女の表情 | 32 |

火の炉、知恵の瞳



—— 知識とは力だ、知識とは武器だ、知識とは暴力だ。

痛みが走る。自分の中にある筈のない部位が、空想の臓器が身もよだつほどの痛みが走る。

まるで腹に突き立てられた錆だらけのなまくらな刃物でぐちやぐちやと不規則に下手糞にこちらへのなんら配慮もないような技量で腹の中をかき回されているかのような痛みが、それとも全力で振るわれたモーニングスターで何度も何度も腰を砕かれているにも関わらずそれが繰り返されミンチでも作られているかのような、少なく見積もっても常人ならば激痛で意識を手放すどころの話ではない。

そんな痛みが絶えず、自分の中で何度も何度も走っていく。
痛い、痛い、痛い。

どうしようもないほどに痛い。

だが、それらを全てただただ気力一つで無視していく。

別に平気ではない。普通の人間と比べれば、それこそ怪物なんてものではないほどに頑丈であり痛みにも慣れている。慣れているとしても臓器の痛みから派生していくモノには思わずのたうち回りたくなるが、この場において気力で全て押さえこむ。自分だから出来る事、他の同類に耐えられるだろうか？という疑問すら思考の端で湧いてくるが、少なくとも約三名を除いて期待は出来ないモノだろう。

何度感してもキツイし辛いそれを経験、今後味わうかもしれない人々に変わらぬ敬意を胸の中で示しながら、彼は眼下を視る。

炎。

そうとしか表現できぬほどの炎の海が眼下に広がっている。

どのような大火災が起きればここまでの光景になるのかも分からないほどのソレを前にして、彼は僅かに汗が滲みだすのを無視しながら炎の海を見据える。さながら巨大な焼却炉の中か、下手をすれば小さな村一つ呑み込んでしまえるほどの空間にあふれんばかりの炎、頭上を見上げずとも外気を感じない時点でこの空間は完全に密閉された炉であるのは彼も当然の様に理解していた。

こんな場所に滞在など出来ないモノだが、だからといって脱出の為に何かを探すという行動一つはしない。

彼は知っているし、分かっている。

この空間が何なのか、どうすれば出る事が出来るのか。だから、彼は宙に足場を作り眼下の炎の海を見下ろしている。

『オオオオオオオ!!』

炉の中に咆哮が響き渡る。

ただそれだけで空間がたわみ、聞くだけで人体を破壊しかねないそれは炎の海を周囲にまき散らし隙間を埋める様に炎の海を広げていき、代わりにその炎の海の中心を晒しあげた。

炎の海の底。空間の地肌が露わになった底にいるのは一体の巨人。萎びた両脚に反して筋肉の塊と形容できるほどに太ましい剛腕、金鎚を握る老巨人。

萎びた脚のせいで立つことはなく、胡坐をかくように座っていると、いうのにも関わらず普通の家屋を一棟、二棟重ねたとしてもなお足りぬその背丈、その威容は正しく眼下の老巨人が尋常の存在ではないことを如実に表している。

そんな老巨人が天井を仰ぎ見て、彼と視線ががち合った。

『来たか、エピュメテウスの申し子』

「どうも、おじい様。とでも、言えばいいか？」

地に響くほどの低く厳つき声が先ほどの咆哮とまではいかずとも

質量を有しながら炉に響いていき、それに対して彼はまるで軽口同然の返答をする。だが、その表情は言葉とは裏腹に一切の軽薄さなどありはしない。

彼——くどうさくま 玖堂朔真の表情に一切の遊びはない。

今もこの瞬間、激痛が走っているというのにも関わらず、痛みなど顔に出すことはなく戦士としての敵対者へと向けるモノへと切り替わっている。

だが、それは見上げる老巨人とて変わりはない。

人間の身の丈程はある金鎚を握りしめ、握らぬ手には光り輝く何かを携えて、その視線は敵対者への敵意を滲みらせながら。

「火、火山、雷、鍛冶——ああ、輝き、太陽、とはな」

『我が身を覗くか、不愉快だなエピュメテウスの申し子。故に死ぬ、我が炉に焚べる事すらなく灰も遺らずに』

「お前が死ぬ」

交わす言葉に囚らんはない。

敵意と殺意だけが交錯し、どちらからともなく、死が殺到した。

炉の天井部より降り注ぐ槍の雨。一つ一つに濃密な殺意が込められた槍が無尽蔵にそれこそ雨の様に一切の隙間なく老巨人へと降り注いでいく。まるで手品の様に、虚空から生み出されては降り注いでいくそれを前に老巨人はその手に握る金鎚を振るえば即座に老巨人の頭上を覆う巨大な円形の盾が出現し、まるで傘の様に槍の雨を全て受け止め切る。

雨の様に降り注ぐソレは当然、十や百では済まない数。

それらを受け止めながらも盾には微塵の傷も付いてはいない事に朔真は落胆も驚愕も反応はせず、指先で虚空を描く。

「——車輪は回る、一年は終わり始まり巡る、かくして欠乏す」

盾でもって防ぐが為に視界が塞がった。それは致命的な隙でしか

なく三種類の文字の様な記号が中空で円環を構築し始め、まるでミキサーの様な速度で回転を始める。

何度も回っていくソレに伴って槍の雨では傷一つ汚れ一つも付かなかったはずの盾の輝きが少しずつくすみ始めていく。まるでそれは何年も整備の一つもせずに使ひ古してきたように摩耗しているかのようで――

『貴様、我を相手に何たる侮辱をしてくれる』

「敵の嫌がらせをするのは当然だろう。何より、敵の武器を使い物に出来ないようにするのは定石じゃないか」

くすんだ盾は輝きへと変換され、大きく顔を顰めた老巨人がより一層敵意を剥き出しにしながらその手に握る輝きから雷光を迸らせ始め、金鎚を振るい火が蠢いて槍を作り出していく。それは先ほどの朔真の行った光景の返礼。

作りあげられた投擲用の長槍は作られた端から朔真へと放たれていく。同時にその空隙に雷光が走り、無数の弾幕として朔真へと殺到していく。

「^{ゼウス}天空神の雷霆か。いや、違うな」

眼前に迫るそれらを大気を蹴りつけながら、大きく曲線を描くように射線から外れ回避していく。無論、老巨人もまたそんな回避を許すはずもない。

少しずつ長槍と雷の弾幕がその射線を回避する朔真へと合わせていく。だが、容易く追いつかれる程朔真の足は遅くはない。

吹き抜ける風のように、炉の中を駆け抜けていく。

だが、老巨人はその程度では済ませない。回避し炉の壁へと突き刺さった筈の長槍が次々と壁から抜け落ちていき中空でその穂先を朔真へと執着しまるで誘導ミサイルのように追尾していく。

対して八頭八尾やっがしちやっびの妖蛇が姿を現してすぐさまその八尾の内一尾を振るって朔真を追尾していた長槍を蹴散らし打ち砕く。

数百あった長槍はその半数以上が打ち払われたが、それでも何十本もの長槍が妖蛇の尾や胴体などに突き刺さっていき、逃れた残りの長槍がまるで高性能なラジコン操作でも受けているようにその場で方向転換をしながら妖蛇を避けて朔真へと追尾を再開していく。

『その権能……怪物の母胎、そしてギリシアの気配。エキドナの権能か!!』

「使い勝手は悪いがそれなりに重宝している」

這い出た妖蛇の纏う気配から権能の元となった神の名を看破した老巨人へとそんな何とも言えぬ返答をした朔真は炉の底へと落下していく妖蛇を見送りつつ、自分へと迫っていく長槍への対処を始めていく。

既に先ほどまで感じていた痛みは無く、削れていた精神力を戻して次の一手を切るために言霊ではない言葉を告げていく。

「鍛冶に火、それは当然繋がる言葉だ。火が無ければ鍛冶は生まれやしない、そして人は文明の象徴であり鍛冶という物を加工する行為もまた文明の象徴だ。だが、これだけでは鍛冶神でしかなく、どこの神なのかは不明だ。では、雷と火山、この要素を有する鍛冶神と言う区分で言えばおのずとその正体も掴めてくる」

『ッ、我が来歴を無遠慮に探るか、エピュメテウスの申し子!!』

自身を構成する内側すら無遠慮に暴き立てていく様に言葉を口にしていくなかに朔真へと老巨人は不快に叫びながらその手に握る光り輝くモノより無数の刃を作り出しては放っていく。

追尾してくる長槍をその手にいつの間にかに握っていた槍でもって打ち払い折り砕きながら風の様に空隙を縫いながら適切に対処しつつ、新たに放たれた刃を視界の端に収めつつやはり言葉を口にする

のをやめることはない。

「オリュンポス十二神。 天空神ゼウスと貞淑神ヘラの息子、鍛冶神ヘファイストス。

それが、お前の名——ではない」

——ギイエヤアアアアアアツ!!

咆哮と共に朔真へと迫っていた刃が横合いから飛んできた溶岩の様な塊によつて吹き飛ばされていく。

それに思わず老巨人が視線を朔真から咆哮の、溶岩弾の出所へと向ければそこには炎の海をまるで本当の海を退ける様にこちらへと突き進んでくる妖蛇の姿。

如何に神獣であつても自身の領域、この炉に満ちる炎の前では容易く焼け死ぬと考え気に留めていなかったが故に、妖蛇が動いているのに気付くのが遅れた老巨人であるがそれでも神獣程度に遅れは取りはしない。確かに権能によつて生まれた怪物、それに対して自分は鍛冶神、武器を振るう神ではない。だが、だとしても、神獣風情と、判断して朔真へと視線を戻す。

だが、その判断は間違いだ。

「ヘファイストスでは、他の靈視に合わない。輝きとは？太陽とは？そう考えれば、次に思い浮かぶのはヘファイストスの類似神、つまりローマ神話におけるヘファイストスであるウウルカヌスになる。ああ、ここまで言えばわかるか？わかるだろう、俺の瞳は既にお前を暴きたてた

では、ここに知恵の新芽を手折ろう」

頭上より落下し始める朔真。

その手には先ほどまでの槍は無く、代わりにまるで折ってしまった若い木の枝の様なモノが握られていた。

事になる。振りかぶった腕に四頭が噛みつき、残った四頭が咆哮をあげながらその顎を開き溶岩の熱を喉奥より覗かせていたからだ。

『蛇だと……チイツ!!』

神獣如きと捨て置いた、ウウルカヌス自身の判断ミスが招いた事態に舌打ちつつも即座に噛まれていない手に持つ輝きより雷光が迸り始める。

だが、すぐさま、自分が今誰を狙っていたかを思い出し視線を妖蛇から朔真へと向き直す。

自身の目前、宙を風のように浮く朔真の胸には大きく成長した枝葉が茂り、その向こう側に見える朔真と視線がかち合った。

「そういうえば、蛇、アテナにこっぴどく振られていたなお前はヘファイストス」

『貴い様アツツ!!』

そんな挑発めいた言葉を聞いて、ウウルカヌスは絶叫をあげる。だが、行動するにはもう遅い。

言霊を口にしながら、朔真は自分の胸、心臓より知恵の枝を引き抜く。

「〃泉の知恵を以て育む新芽　ここに我が臓腑を捧ぎ　一投一殺勝利の槍を〃」

心臓の血を啜り知恵を以て育まれた枝葉が、白い輝きを纏った槍へと整えられていく。

知恵を司らずとも分かる。

それは自分を殺す為だけに詭えられた武器である、と。

『アアアアアツツ!!太陽よオオオツツ!!』

「いまさら、太陽か!!当然、それも織り込んでいるに決まっているだろうツツ!!」

その手に持つ輝き、極小の太陽その断片が励起しはじめるがもう遅い。

ウウルカヌスのそれが機能し始めるよりも先に、朔真の手より放たれた白い枝の槍がウウルカヌスの胸部を吹き飛ばした。



贄の太陽、泉の瞳



知恵の白い枝——玖堂朔真が、手にした第一の権能の一端。

『瞳』と称される権能と、第二の権能による自身への縛りによって確立された朔真にとつての切り札の一つであるそれは寸分違わず、ウルカヌスの胸部を吹き飛ばした。

『瞳』によって閲覧し、その知識を口遊ぶ事でウルカヌスに対してその力を発揮できるように生育した新芽の枝を自身の心臓を贄として貫き捧げて整えたそれは、白い枝によって作られた木製の槍であるが、一種の権能殺しとしての武器である白い枝は例え相手が火や太陽であろうとも、正しく神話を紐解き調整すれば十分に槍としての機能を再現する。

無論、そういつた個神各々への特効権能として成立させるにはいくつかの制限が存在しているが、少なくとも朔真はウルカヌスに対してそれら制限を全て満たし、対ウルカヌス用の槍として調整した。であるからこそ、ウルカヌスの胸部を吹き飛ばす程のモノとなった。

「——ああ、なるほど。戦士では、無い、な」

そう、目の前の光景を見ながら朔真は零した。

ウルカヌスの作りあげたアストラル界、炎に満ちていてもなお薄暗さすらあつた炉に瞬間光が満ちていく。並々ならぬ輝きを放ち、膨張していく光の巨人を前にして事態が覆ったことをその『瞳』で即座に理解した朔真は既に蒸発した過半数以上の頭に発狂しながら絶叫する妖蛇の尾を掴み炉の壁面へと大きく飛び退いた。

ウルカヌスであつた筈の光の巨人、先ほど白い枝によって消し飛ばされたはずの胸部は既にその輪郭を取り戻しており、むしろ輪郭は

失っているのだろう。鍛冶神として最低限纏っていたモノもはや光と化した事で肉体と差異を失っているほどで正しく人型の光しか言いようのないモノとなっていた。

鍛冶神であるウウルカヌスにそのような伝承、神話はない。

如何に火であれども、そんなモノになる筈がない。

この場にいるのが他の神殺しであれば、そういった思考を抱く事だろうがここにいるのは朔真だ。

ウウルカヌスが光の巨人となった時点で、それがどういう道理で成り立っているのかを知っていた。

「主軸は確かにウウルカヌスだ。その点を変えようのない事実だ。だが、今回に限ればスーリヤに寄っているという事だろう。さつきも言ったが、ウウルカヌス、お前の名の語源には輝き、またはそれに準ずるエネルギーであるインド・ヨーロッパ祖語に由来する『varcas』というヴェーダ語がある。つまり、これはスーリヤやアグニの持ち物でもある。つまり、お前は鍛冶神であると同時にスーリヤという太陽神が有する光り輝くエネルギーの塊、太陽の側面があるという事だ」

既に先ほどの一撃で白い枝はただの知恵へと還元されてしまっている。

一投一殺を告げた様に、白い枝には一度の戦闘で一柱の神に一度しか撃てないという制限が存在している。つまり、このウウルカヌスに對して、二度目はない。

だが、知識とは、力だ。

白い枝を生育する為に『瞳』を介して得た知識は無駄になることはない。

知っていれば、何事も対処できる。少なくとも、朔真はそう、考えているのだから次の手段を切るための準備を始めている。

纏っていた機動力確保のための黒い風を消して、蒸発した頭部を再生し始めている妖蛇の胴体に直地する。

『カアミ、ゴオオロオオシイイツ!!』

「お前の持っていた輝く光は所謂、極小の太陽、その断片と言っている。そして、お前は鍛冶神である。その点を考えれば、今のお前の姿も理解できる。お前は自身の持つスーリヤ、太陽の側面と鍛冶神としての権能を利用することで自分自身を加工した」

ヘファイストスとしての部分だったのだろう羨びていたはずの足はやはり光と変わっており先までの胡坐をかいていた姿とは打って変わって立ち上がりその巨人としての威容を露わとする。

金鎚はない、武器はない、しかし全身から輝き放つ光は陽光でありすなわち太陽風を発している。それを『瞳』により底上げしている魔術で防ぎながらここがアストラル界である事に感謝しながら朔真は今すぐにでもこちらへと跳んできそうなウルカヌススーリヤを視ながら、冷静に次の一手を進めていく。

既に、二つの権能を行使している。『瞳』の知識閲覧程度では負担になる筈もないが、やはり白い枝を作ること自体がかなりの消耗であり、神獣である妖蛇を産み落としたのも充分に朔真の消耗の一助となっている。

同時に権能を行使したわけではないが、それでも消耗はしている以上、戦いは長引かせるつもりはない、

「悪いが、結局のところ太陽であるなら、俺にも手はある」

片手を前に出して、聖句を告げる。

「〴〵贄を捧げろ 命を捧げろ

廻る巡る世界陽が回る

夜空の太陽が鏡の中でケタリと嗤う」

呪力が吹き荒れていく。足場となっていた妖蛇がその心臓を内側

から枝葉によって突き破られ絶命し、それと同時にウウルカヌスが全身から陽光を放ちながら膨張を始めていく。

瞬きする間もなく、その体軀は一回り二回りと膨張していくのが見える。

この場が炉という閉じられた空間であったことが幸いだろう。

人型の太陽と化したウウルカヌスは既に太陽風、プラズマを周囲に垂れ流しており同時に陽光と言う名の熱を発している。

もしも、この場が人里に近ければ十数キロの範囲にいる人間は例え人の領域を外れた魔術師であろうとも即座に死に絶えることは火を見るよりも明らかな話だ。その点を思えば、朔真はウウルカヌスがこうして鍛冶神として自身の領域に引きこもっているのは都合がよかつたと言ってもいい。

そして

「お前たちの傍らに立つが故に その代償を以て報いよう

我が身は山の心臓、千貌であるが故に——！！」

それは、被害という点以外に、朔真がウウルカヌスを殺すという点においても変わらない。

第五の権能によって産み落とされた眷属である妖蛇の心臓を呼び水として、聖句をもって開かれた第二の権能が励起する。

朔真の背後に現れる黒曜石の塊。

それは直径にして4メートル弱の円形の黒曜石、その表面には放射状に広がるモチーフが彫刻されており、知識を持っている者が見ればそれが古代アステカのモノリス、アステカの宇宙観、時間観、歴史観をあらわす石彫の造形物、太陽の石であるのが分かる事だろう。

だが、オリジナルと違う点で言えば、それが黒曜石で形成されているという点だが……。

「代償を捧ぐ、第五の権能を贄に、夜の太陽を此処に」

太陽の黒曜石が鏡面へと変じ、煙と風を吐き出していく。

既に先ほどの倍近くにまで膨張したウウルカヌスが咆哮し太陽風と陽光を迸らせながら、その巨体を動かし始める。先ほどまでの体軀であれば、壁面へと飛び退いていた朔真との距離はあったが、膨張した分その朔真との距離は近づき数歩でその距離を埋める。

太陽風と陽光自体は『瞳』を使いながら防いでいくが、太陽そのものとなったウウルカヌスが直接殴りかかってくるというのならば話は別だ。質量をもって神に殴られれば魔術では防ぐことは出来ない。

だが、既に朔真の仕込みは終わっている。

「太陽であるならば、その太陽を殺そう。巨人であるならば、巨人を殺そう。権能一つを代償にテスカトリポカの、夜の太陽を此処に」

煙と風を吐き出し続ける太陽の黒曜石から不快で不吉な楽器の音色が奏でられ、獣の叫び声、身の毛もよだつような鳥の叫び声が炉に響いていく。

瞬間、朔真とウウルカヌスの頭上に新たな太陽が生じた。

光り輝くウウルカヌスの太陽とは打って変わって黒く、黒い、太陽がウウルカヌスから陽光を奪いながら膨張していき落下する。

ウウルカヌスから太陽を奪い黒い太陽が膨張していくのに対して、ウウルカヌスは膨張していた身体を逆再生する様に萎ませ落下してきた黒い太陽へと呑み込まれた。

イタリア・カンパニア州、ナポリ湾岸に存在するヴェスヴィオス火山の麓、その一角で唐突に煙と熱風が吹き抜けていく。

まるで爆発物が爆破されたかのようなそれだが、どこも被害は無くそれどころか周囲は誰一人としてその煙と熱風に気づくことはない。

そんな煙と熱風が生じた何もいなかった筈の空間から一人、青年がまるでコンビニでも行ってきたような気軽さで姿を現した。黒のタートルネックの上に深緑のジャケットを着たアジア人、玖堂朔真は軽く首元を直しながらその場から数歩歩いてからその視線を周囲へと巡らせる。

この場には、朔真以外に十数人の人間がいたが皆一樣に何もない所から人が現れたというのに驚愕の表情一つすら見せず、むしろほとんどの人間が安堵の表情と緊張の表情を浮かべていた。そんな彼らから視線を外し、集団から少し外れた場所に立つ人間へと向ける。

「お疲れ様です、我が王」

そこにいたのは美しい女だった。まるで陶器で出来ているかの様に白い肌、腰まで伸ばしている桃色の髪を首元で一度束ねた髪型を持ったブラウスに身を包む彼女はおよそ魔的であった。造形された魔性の美、そう呼称するに相応しい彼女はたおやかな笑みを浮かべながら朔真へと労いの言葉をかけながら薄手の手袋を取り出し手渡す。

「オルトリンデ。仕事は終わりだ、さっさと帰国する。あの小僧が戻ってくる前に」

「既に」

オルトリンデ、そう呼んだ彼女から受け取った手袋を右手、黒ずみひび割れ炭化した様に見えるソレを隠す様につけ、この場の彼らナポリの魔術師たちになどまるで興味がないのかその場を後にしていく。そんな朔真を呼び止めようとでもしたのか、魔術師らの中の一人が一步その場から踏み出すと同時に振り返ったオルトリンデと目が合い、まるでその場に縫い留められたかのように彼らを見送ることしか出来なかった。

そんな彼らナポリの魔術師らなど既に知らないとしても言う様にあの場を後にした朔真とオルトリンデの足は真つすぐにヴェスヴィオ

ス火山麓にあるバス停へと向かっていた。

「このまま、まっすぐ行けばバス停ね。大丈夫、ほとんど待たずに乗れるみたい」

いつの間にか身に着けていたのか肩掛けのポーチから手帳を取り出したオルトリンデがまるで先ほどまでのモノとは打って変わった口調で朔真へと話しかければ、朔真はその足の速度を緩めることなく、ため息を吐く。

別にオルトリンデの口調が気安いモノに変わったことに対してではない。

「そうか。なら、急いだ甲斐があったらしい。先に言っておくが、もしも帰国の道中であの小僧が絡んできたとしても何も相手をするな。俺はさっさと家に帰りたい」

「もお、言わなくても分かっているわよ。でも、あの人、今ローマの方に行ってるんでしょ？確か、特に移動が楽になるような権能を持ってなかったと思うのだけど」

「悪いが。俺はアレの突発的な行動に関しては何も信用はしていない。リベラの事は信頼してはいるが、事こういう状況においては俺たちの悪運とアレの行動力による化学反応の方が悪い意味で信頼が強い。俺は偶然にも、アレが鉄道に乗ってナポリへ向かってきていると言われても信じるだろう」

バス停へとついて早々にやってきたナポリ行きのバス、その奥まった席へと着いた朔真は炭化した右腕を手袋の腕から触れる。

朔真の持つ第二の権能、代償と報いの『黒曜石』と称するソレによって齎した太陽により討たれたウウルカヌスの最後つ屁とでも言える最初の時の様な極小の太陽の断片による一撃で炭化した右腕。右腕だけで済んだと言えいいのか、それとも最後の最後で気を抜いたか間抜けな話とするかは朔真のみぞ知る話だろう。

「あちらに戻ってからでいいか」

たまたま、シチリアに用事があってイタリアへと訪れ、一週間近くの用事を終えて後は帰宅だけとなったタイミングでナポリの魔術師たちにまつろわぬ神出現の兆しをシチリア経由で聞きつつもイタリアの神殺しである関わり合いたくない後輩へと任せるつもりでいたにも関わらず、当の後輩は何故か彼の手綱を握らされている執事ですら把握できずイタリアにいるのかどうかも分からないという有様。なお、後輩の居所が分かったのはまつろわぬ神とぶつかる直前であった。

結果として、一番近くかつナポリと言うシチリアから見ても対岸に出現するまつろわぬ神を対岸の火事などとは到底言えず、まつろわぬ神の相手をやる事となった朔真だが、本来ならばシチリアの魔術結社へと色々と伝える事や後処理などがあるのだが、それらは全てその場にいたナポリの魔術師らへと押し付けて朔真はさっさと帰りたいかった。

彼はその名前から当然わかるように、日本人だ。

フィールドワークよりもインドアで研究する方が性に合っている学者を自称する男である様にこんな外にいるよりも自分の家で研究でもしているのが落ち着ける。

「ほんと、大変だったわね。でも、ザンパリーニの頼みじゃなくてもそれはそれとして、戦ったんでしよう?」

「当然だよ。変に無視をして、俺に面倒事が後々で降りかかってきても困るだけだからな」

その結果、第五の権能が数日使えなくなるのは妥協したくはないが。

そう付け加えながら、腕を組み朔真は目を閉じた。



帰路の談笑、不穩の前触れ



【二十世紀中期、第四のカンピオーネと確認された玖堂朔真についての報告書より抜粋】

北欧神話に登場する主神とされるオーデイン、彼の神は戦争と死の神であると同時に詩文の神であり吟遊詩人のパトロン、更には船守や魔術といった様々な分野に精通した神でもあります。

そんなオーデインの神話において最も有名ともされるのが、彼の神の知識に対する貪欲さを表わすとも言える自身を生贄にする事でそれらを得た話でしょう。彼の神はユグドラシルの根元に存在する知識と知恵が隠されているとされる賢人ミーミルの所有する泉より知恵を身に着け魔術を会得する、その代償として自身の片目を失ったとされています。また、オーデインはルーン文字の知識を会得する為にユグドラシルより自身の首を吊りながらグングニルによって自身を貫き九日九晩、創造神へと捧げる事で結果として叡智を獲得しています。

そのような知識に対する貪欲さから、魔術師、詩人、賢者の神ともされる彼の大神を殺害することで王となったのが玖堂朔真という青年なのです。

「なるほど、それでそんなにも機嫌が悪いんですね」

「そうなの。別に出不精じゃあないのに、まつろわぬ神とかが関わる」と途端にこれなのよ」

耳の端で、そんな楽し気な会話が聴こえてくる。

だが、それに口を挟むような意味も無ければ、そういう気分でもない俺はあえて遮音をするわけもなく窓から見える景色を眺めながらも意識の半分以上を腕へと向ける。ナポリでのまつろわぬウルカヌスの最後の一手によつて半分以上が炭化してしまった右腕、腕の感覚自体は残っているし動かそうと思えば普段通りに動くことも出来はする。

出来はするが、やはり感覚が残っている分痛みと熱が実に面倒なところの上ないと言えるだろう。

元々痛みに対しては慣れた、というよりも無視出来るようにしているがそれでも痛いモノは痛い、なら当然治す選択を取る。だが、今の右腕は少し面倒な状態になっている。

それは偏に俺の自業自得とも言える事だが、イタリアから日本へ帰る間俺は万が一のことを考えてこの腕の治療をしていなかった。

イタリアの後輩にもしも呪力を感知されでもしたら、十中八九絡まれるというのはここ数年の経験で嫌と言うほど覚えた為、嗅ぎつけられない為に呪力を閉じて最低限の隠密を使っただけ、フライト中も万が一神殺しとしての呪力が神や神獣のきっかけになる可能性を考慮して最低限の治療力だけで乗り切った。結果として、実に中途半端な状態で治療されてしまっている。

変に癒着でもしていたら、元に戻すのが実に面倒くさくなるだろうな。

「……いつその事、切り落とした方が早いかな」

そつちの方が権能で一気に戻せるから楽だ。

そこまで思考を回していて、ふと車内が唐突に静かになった。思わず、俺は意識を其方へと戻してオルトリンデを見れば

「……ええっと、朔真？ごめんなさい、独り言なのは分かってるけど、何を？もしかして、誰を？」

「あー、その玖堂先生、聴こえてなかったことにした方がいいでしょうか、ね？」

「腕だ、あと別に気にするな冬馬」

隣で困った表情でそう聞いてくるオルトリンデに簡潔に答えて、バックミラー越しで何とも言えぬ表情の冬馬に軽く左手を払う。

それを見て苦笑する元教え子に何とも言えぬ気分になりはするが、これも神殺しの相手役を任される程度には有能で距離が近かった、という貧乏くじを引いてしまったせいだろう………自分の事ながら、少し心に来るものがあるな。

「腕、ですか。先ほど、オルトリンデさんも話していましたがまつろわぬウルカヌスの最後の一撃で、との事ですが………実際のところどうなんですか？」

「曲がりなりにも太陽の断片を用いた即席の武器だ。黒い太陽を使って潰したとしても充分に武器としては有効だった。だが、奴が戦士ではなく鍛冶師であることが幸いだった、少なくとも治す分にはなんら支障はない」

太陽ではなく、不治の呪いを付与した武器であった場合ならば、問題になるが……。

そう、胸中で付け足しながら視線だけをオルトリンデへ向ければ案の定、ジト目のような視線が突き刺してきており思わず視線を逸らしておく。

「どうして治せるのにわざわざ腕を切り落とすなんて選択が出るのかしら、ねえ」

「……流石に手間だからな。ルーンで修復する分には問題ないだろうが、曲がりなりにもカンピオーネの耐性を考えれば時間がかかる、それと炭化した部分が癒着して変に阻害されるのも面倒だ。なら、いつその事腕を切り落として権能を回す方が都合がいい。当然だろうか？」

「当然じゃないでしょ、朔真」

何を言っているのか。

まつろわぬ神との戦いで多少の損壊は前提であり、むしろこれぐらいで済んでいるのが奇跡的なくらいだ。なら、腕を切り落とすぐらいは十分な許容範囲はずだ。何も知らない人間ではないだろうに。

それこそ、下半身を吹き飛ばしたのも目の前で見たことがある筈だが。

「その場でするのと、じゃ違うと思うけど」

「そうだな。だが、そっちのが楽だろう」

「ええつと……車内ではご遠慮いただければ」

何やら、冬馬がだいぶ失礼な事を宣っているが、それを無視して目を瞑る。

普通に考えて車内で腕を切り落とすわけがないだろう。まさかと思うが俺はここまでアレな人間であると思われているのだろうか？いや、神殺しをするような人間は軒並みどうかしているのは周知の事実だろう。

例えば、狼王。

例えば、負けず嫌いの仙女。

例えば、はた迷惑極まりない夫人。

例えば、例えば……恐らくまともなのは米国の奴だろう。形態はやや異なるが同じテスカトリポカの権能を有する他のカンピオーネ以上に同類と言ってしまうべきカンピオーネだ。まあ、コスプレ趣味というのが何ともアレだがそれも個性というモノなのだろう。

ふと冷静に考えると、

「カンピオーネは俺を含めて軒並みどうかしているな。個性の問題じゃあない」

「……ええ、玖堂先生。いまさらですか……」

「いまさらじゃないかしら、朔真」

「そ、そこまで言うか」

オルトリンデに言われるならばともかく、冬馬にまで言われるとは思っていなかったな。

確かに事実かもしれないが、元教え子にまでそういわれるのは存外堪えるモノがある。

「……それで、俺がいない間に何かあったか？」

「こういう時の話の切り替えは相変わらず下手ですね。おっと、ええ、いくつか。まず以前に玖堂先生と契約をしていた『民』の術者の団体がきな臭くなっておりまして、どうやら金銭面以外にも」

「……ああ、あそこか。確かに報いに対しての代償を徴収する時期も近いな。その為に……いや、違うな。何か考えているのか……これがただの踏み倒すつもりなら、無能ナルになってもらうが……注意を頼む」

「はい、それとはまた別なのですが、オルトリンデさんから報告されていると思いますが、先日九州で出現した神獣の件ですが、アウスラグさんによって無事討伐されました」

冬馬からの報告を聞きながら、オルトリンデより受け取った報告書を手に取り目を走らせる。留守を任せていたもう一人の身内が神獣を相手にしたのは知ってはいたが、何か面倒後音を持ってきていないことを願うばかりであるが。



面倒の前触れ、白鳥の翼



ワルキューレ
戦乙女。

神殺しについて知る魔術師ならば知らない者がいないほどに、魔術
界隈においては有名な存在だ。

戦乙女と聞いて一昔前なら魔女や騎士の号を有する女魔術師が思
い浮かぶものだったが、第四の神殺しである玖堂朔真が現れてからは
その意味合いは大本の神話に近しいモノへと変わっていった。

白鳥の翼を持ち、英雄たちの魂を刈り取る死神。

北欧神話に出てくる半神半人の戦乙女。

玖堂朔真の有する権能で生まれ落ちた現代の戦乙女、北欧神話の
神々ではなく神殺しの魔王の使いとなった彼女たち戦乙女は可憐な
少女の外見でありながらもその中身は神獣とそう大差がない。

それは、玖堂朔真の傍付きであるオルトリンデと名乗る女、彼女も
例外ではない。

島根県某所山間部、人が住むような集落も充分に離れているような
奥地も奥地の一画。

山を揺らす程の咆哮が響きあがりながら、怪物がのたうち回る。身
の丈百メートルは下らないだろう体長に加えて軽自動車など容易く
呑み込んでしまうに違いない胴回りを持つ巨躯の怪物は、黒焦げたよ
うな鱗とその鱗同士の境に赤熱したような赤を孕んだ姿が目を引く
事だろう。

誰がどう見ようとも『蛇』の神獣がそこにいた。

確かにこの場所が人里離れたような深い山の奥、その谷底にあたる
場所だとしても本格的に暴れ出せばそんな距離など意味をなさず、集
落は簡単に潰されるのが目に見えている。

そんな怪物。

だが、神獣は神獣でしかない。

『蛇』であるのは問題だが」

神獣より数キロは離れた山間部の中でも見渡しのいい崖上から、朔真は僅かに表情を顰めつつ神獣を視ていた。

確かに一般的な価値観で考えれば神獣が顕れた事は充分に問題だが、朔真からすれば顕れた事自体は大した問題ではなく、問題なのは彼が呟いたように『蛇』の神獣である事だけ。

「既に日光には確認しています。良いのか悪いのか、そこまでの格があるわけでないのか、特に反応はないようです」

「そうか、それなら、いい」

そんな朔真の懸念を拭う様に電話を終えた冬馬の言葉に朔真は軽く息をつく。

この日本における魔術結社、正史編纂委員会の古老と呼ばれる者たちが用意した竜蛇避け、『蛇』に属するまつろわぬ神や神獣が日本で顕現し暴れた際に動く日光に封じられた『鋼』の軍神。

それが動くのは朔真にとって避けたいことだっただけに、冬馬の言葉に安堵しつつ先日イタリアでの一件で焼き潰した腕を軽く振りつつ、その視線は変わらず神獣へと向けられる。

日光から『鋼』の軍神が出てくるのなら朔真は神殺しとして、神獣が討伐された後のことを考える日長があったが心配は杞憂であった今なら話は別になる。

「オルトリンデ」

「はあい」

たった一言、口にするだけで朔真の傍らにいた女は朔真同様に短い

返事をして、まるで子供が遊ぶように軽々とその場から、崖上から跳ね飛んだ。

常人ならば充分に自殺行為。だが、彼女は戦乙女^{ワルキューレ}。

彼女の着ていたブラウスが淡い光を纏ったと思えば次の瞬間には、白と黒を基調とした衣服へと変換されていく。元より造形された魔性の美、と称される姿も戦乙女としての戦装束へと着替える事により洗練されていく。

落下していくだけの空中にまるで見えない床があるかのようにオルトリンデは着地し、その手に異形の弓を携えてスケート選手のように空中を滑りながら数キロ先の神獣へと向かっていく。

「少なくともこれで解決、ですね」

「だろうな。あの猿が反応しないのならば、その程度だ」

「ええ、私としても気が楽になります」

「冬馬……お前な」

彼女の後ろ姿を見送りながら二人はそんな軽口を交わしていた。

「ところで、ずっと聞こうと思っていたのですが、玖堂先生」

「どうした」

「彼女の、いえ、戦乙女^{ワルキューレ}の戦装束は——」

「趣味だ」

「——あ、はい」

「もう、朔真ったら。確かに朔真の趣味ではあるけれど、私の趣味でもあるのよね」

空気を滑りながら、僅かに聞こえた言葉にクスリと笑みを浮かべながらオルトリンデは既に神獣との距離を一キロ以下にまで迫ってい

た。

オルトリンデは戦乙女である。

それは、朔真の有する第一権能『瞳』と第三権能『白鳥』の二種権能を複合して作りあげた人型の神獣。神殺しである朔真の戦いのために動く騎士であり魔女、それが彼女ら戦乙女^{フルキユレ}。

「さあ、お仕事よね」

「シィアアアアアアアアアア!!」

上空より迫るオルトリンデを察知したか、神獣がその大顎を開きどんな建物であろうとも噛み砕くことが出来ると思えるほどの牙を剥き出しにする。

威嚇、ではない。

既に神獣はオルトリンデを脅威と認識しているのだろう、開かれた大顎、その口腔の奥底が明るくなり始めているのをオルトリンデもまた認識した。

迸るのは爆焰。火炎放射じみた焰が中空を裂きながらオルトリンデを襲うが既にその場に彼女の姿はない。

空中を滑走する速度を上げたオルトリンデは神獣の直情へと滑り込みながら身を翻し、携えた弓に番えた呪力の矢を神獣の背へと叩き込んでいく。

一本一本が戦車砲が如く、神獣の身体に着弾してはその鱗を弾け吹き飛ばしていく。

並の神獣であれば既に痛打となる一撃だが、そこはやはり『蛇』の系譜か。

削れた肉が溢れる血によって補強し修復されていく。そんな光景を目にしたオルトリンデは僅かに目を見開きながらも宙を蹴りつけて常に滑走する。

「思ったよりも頑丈、ね。でも、限界まで削れば私の勝ちね」

「シィアアアツツ!!」

絶叫と共に放たれるのは先ほどと同じ爆焰、だが今度は連続で直情のオルトリンデへと。

足を止める事無く滑走し続けるオルトリンデにそれらが直撃することはなく霧散していく。

「……………雷?」

自分目掛けて放たれていく爆焰、それを至近距離で見ているオルトリンデは先ほど同様に目を僅かに見開き、その爆焰が火焰だけではなく雷を孕んでいるのに気付いた。

そして、それは

「きな臭いことだ」

観戦していた朔真にも見て取れていた。

ただの『蛇』が火を吹くのならば分かる。神獣なのだ、それぐらいはする。

だが、日光の『鋼』が反応しない程度の『蛇』の神獣が雷を混じらせた炎を吐くのは朔真にとって解せない話だった。

朔真の神殺しとしての経験則、そしてその勘が、面倒事の前兆であると告げているのを朔真は既に感じ始めている。

「しばらくは、家に帰れない、な」

「拠点を用意します」

「いや、アウスラグが福岡にいるだろう。そっちに行く」

「わかりました」

その目を細めながら、右眼に広がる『瞳』の泉が静かに神獣の内を曝け出そうと、波紋をたて始めていた。

「朔真も気づいたみたいね」

数キロ先にいる朔真の『瞳』が動き始めたのを感じ取ったオルトリンデは様子見から行動を切り替え始めていく。滑走していた高度を少しずつ下げる様に滑っていきながらも放たれていく爆焰を回避しつつその弓に呪力の矢を番えていく。

彼女の特徴であるピンク色の髪を揺らしながら滑走し、弦を引き絞る。

「シィアアアアアアアッ!!」

獲物が上空から自分の元へと近づいてきた。それを見過ごすような愚者でなく、神獣はその大顎を開き口腔奥に爆焰と雷を迸らせて滑り降りてくるオルトリンデへと向ける。

だが、オルトリンデは回避する事を選ばず、そのまま神獣の開かれた大顎を真正面に捉え――

「まずは、その少し五月蠅い口をふさがなきや、ね?」

矢を放つ。

呪力の矢が神獣の喉奥へと突き刺さり、刹那激しい光と熱が神獣の口腔奥で炸裂した。

巻き込まれないために矢を放つと同時に後方へと跳び退いたオルトリンデは黒煙と血肉が焼ける臭いに顔を顰めつつ、その手で弓をくるりと回す。

「『勇ましい君よ 貴方の魂をどうか私に 戦場の死化粧で彩った貴方の魂を背にどこまでも』」

朗々と響き渡るのは彼女の聖句。まるで恋焦がれた人へと告白する様に、歌うのは彼女に許された権能の断片^翼。

「^{スワンズレイク・ワルキューレ}湖より飛び立つ私たち」

オルトリンデの影が揺らめき白鳥の翼を作りあげていく。彼女の髪のように淡いピンクの光を孕みながら。

そうして今度はしっかりと大気を踏みしめながら矢を番える。

「やようなら」



『蛇』の神獣、戦乙女表情



「と、いう訳だ。面倒事が片付くまで、ここにいさせてもらう」「何故?」

そんな朔真の突拍子もない言葉にマンションの一室、その部屋の主である銀髪の少女のまるで理解できない様な呆けた言葉が、朔真とオルトリンデを迎える事になった。

島根県山間部奥地に出現した『蛇』の神獣をオルトリンデが起動した権能の断片で討伐してすぐに、朔真一行は福岡県へと移動する事になった。

この神獣の一件がこの一回で終わらないだろう、というのを長年の神殺しとしての経験則や勘で判断した上で京都や同県にある正史編纂委員会が用意している拠点ではなく少し離れた福岡県にある自分の拠点を選んでいた。

既を感じ取っている面倒事の匂いに、朔真は手札を増やすという考えもあるのだろうか――

「勘だよ。少なくとも、アウスラグは手元に置いておきたい」

そう冬馬の疑問に答えて、一行は数時間かけて福岡県へと到着していた。

流石に車で向かうのは冬馬へ大きすぎる負担と考えたのか、正史編纂委員会に用意させた新幹線で向かったが、それでも数時間かける事になった事に朔真は長距離間移動の魔術ないし権能が欲しい、とオルトリンデへと愚痴にもならない言葉を漏らしていた。

そうして、時間をかけて福岡某所にある最上階フロア丸々を抑えて拠点にしたマンションへとたどり着いた朔真はそのまま居住スペースとして抑えている部屋へと押しかけ、冒頭へと至る。

語る事も無いような移動時間で人並みに疲れていた朔真のほとんどを省略された言われた側である銀髪の少女からすれば意味の分からない言葉は、一緒に来たオルトリンデですら思わず苦笑してしまうものだった。

「……すまない、拙の理解力では分からない。一から十とは言わないが……適切な説明を求めたい」

「……ふう、悪い。一先ず、中で話そう」

銀髪の少女の言葉に朔真は謝罪をしつつ、入室する。

神殺しの拠点、と聞いてきつと多くの魔術師や関係者らは大多数が豪華な屋敷であったり、魔術めいた工房を想像する事だろうが朔真自身を知る者からすればそんな想像はどちらかと言えば、最古参の神殺しであるヴォバン侯爵のイメージと混ざっている、と思わず笑ってしまう事だろう。

事実、朔真の拠点であるというこのマンションの一室は、ほとんど富裕層の家庭と何ら変わらない。

ここ数年は朔真よりも九州方面で問題事が起きた時の対処を任されている戦乙女フルキユールが住んでいるという事で多少は本人らの影響が垣間見えるが……少なくとも、想像されるような豪華な室内には合わない——そもそもマンションのワンフロア丸々一つ抑えている時点で普通ではないが——拠点がそこにあった。

「それで、今回はどういう要件だろうか。拙の力が必要なら、わざわざ主上が足を運ばずとも拙が」

リビングのソファアに腰かけて早々に、銀髪の少女がそう口火を切れば朔真がそれに答えるよりも先に、朔真の隣に座ったオルトリンデ

が口を開く。

「数時間前、島根県山間部奥地に神獣が顕れたの」

「神獣が？ 委員会め、わざわざ主上を動かすなど……いや、つまり主上はその神獣に何か感じたのか」

オルトリンデからの簡潔な説明一つで、今この場に朔真がやってきた理由を漠然と理解してみせた少女は視線をオルトリンデから朔真へと向ける。

女性らしい外見のオルトリンデに比べて少女めいた小柄な外見の彼女だが、変化の乏しい表情を僅かに張り詰めらせる。外見に反し、戦乙女らの中で最も朔真との関係が長い彼女だからこそ最低限で朔真の意図を理解できるのだろう。

そんな彼女に朔真は僅かに目を細める。

「恐らく、これで終わらない。あまり、考えたくもない話だが……顕現するのを前提で考えれば、お前がいた方がいいと考えた」

「なるほど、了解した。拙が主上に応えよう」

彼女の即答に朔真は軽く頷きながら、『瞳』で得た情報を開示している。

と言っても、ほとんど大した情報はない。『蛇』でありながら、雷を有しており、炎すら扱う神獣。

その程度でしかない情報を聴いて、彼女は思わず瞼を伏せる。

「なるほど、それは実に奇怪な気がする。雷と炎を有する『蛇』か………ふむ」

「ただの神獣ならここまで、考えなくて済むが」

「一つ、拙から言えるとするれば………先日、拙が神獣を相手にしたのは聞いているだろうか」

ふと、彼女が口にした言葉に朔真は僅かに眉を動かす。

そうして思い返すのは、イタリアでまつろわぬウウルカヌスを相手取り帰国した時に報告された話。九州で出現した神獣を目の前の彼女——アウスラグが、もう一人の戦乙女を引き連れて討伐した、という内容で。

そこまで思い返して朔真はアウスラグを正面から見据える。

『蛇』だったな、だが、そこからか？」

確かに思い返せば、アウスラグが討伐したという神獣も『蛇』の系譜であった様だが、あくまで共通点は『蛇』であることでしかない。

「あの時の神獣は報告の通り、『蛇』だった。白い蛇体に無数の植物を有した豊穰を感じさせる神獣だったけど、その外見にしては神獣としての格は何枚か落ちていた気がする」

「妙な違和感、は共通していると言いたいわけか。なるほど」

結びつきづらい情報、と一蹴するには朔真らの有する情報自体が少ない。

何より朔真にとって、アウスラグは最初に造り上げた戦乙女でありその信頼は正史編纂委員会の者らや元教え子である冬馬ら、それどころかオルトリンデを始めとする他の戦乙女と比べるべくもない。

だからこそ、彼女の感じる違和感をそのまま情報へと組み込んでいく。

喉中で留まっている違和感の正体を吐き出すにも、情報は足りない。

「次を待つ必要があるな」

「朔真がわざわざ、福岡に来たってことは次もこの近くかしら」

「オルトリンデ、また主上を呼び捨てに……いや、今更な話だけれども。拙も同感、主上というよりもカンピオーネの勘は本当に侮れない

し、悪運も」

そこまで口にして、アウスラグはこれ以上の掘り下げは次の神獣が頭現でもしなければ難しいと判断したのか、話を切り上げる様に軽く息を吐いて、その視線はオルトリンデの顔から朔真の腕へと向けられた。

まつろわぬウウルカヌスとの戦いで焼けた腕だが、呪布で巻かれて素肌を隠しているがそれでも僅かな隙間から見える焼け焦げた腕にアウスラグは眉を顰める。

「主上、何故その腕をまだそのままにしているのだろうか」

「ああ、これか。ウウルカヌスの神力が残っていたからな、それが自然治癒を妨害していたのもあって一先ず神力を抜いていた。オルトリンデは聞いていたが、切り落として新しく生やす方が早いんだが、直近でまつろわぬ神とやり合う事も無いと判断してそのままにしていた」

だが、今はそうも言えないか。

そう呟いたと思えば、テーブルの上に斧が置かれていた。

先ほどまで何も置かれていなかった筈のそこに、突如として置かれていた斧に思わずオルトリンデはギョツとし、アウスラグはむっとした表情を見せる。そして、朔真自身は特段変える事もないいつも通りの表情でその斧へと手を伸ばして――

「――いえ、流石にリビングでするのはやめていただきたく」

横合いから伸びた四人目の手によって先に取られた。

「ヴァルトトラウテ」

全員の視線が斧を奪った四人目へと向けられる。

オルトリンデとはまた違ったブラウスを着る彼女は色素の薄い髪を揺らしながら、三人分のティーカップ等に乗せたトレイを斧を奪った手とは別に携えていた。

ヴァルトラウテ、と呼ばれた彼女は非難するような視線を朔真、ではなくアウスラグへと向ける。

「姉様、いいですか？確かにここは王の所有の物件です。しかし、しばらくここで王が過ごす以上、流石にリビングを血濡れにするのは如何なモノでしょうか？王自ら行うにしても、それならそれで別の部屋を薦めるのが王の槍を務める者の判断かと」

「……ラウテ」

斧をオルトリンデへと手渡し、テーブルへとティーカップを並べていくヴァルトラウテに、アウスラグはバツが悪そうな表情をしつつその視線を彼女から外していく。

そんなアウスラグに、ヴァルトラウテはため息をつき、斧を手渡されたオルトリンデは一先ず朔真から手を伸ばすだけでは取られない様に足元へと斧を置きつつヴァルトラウテに微笑む。そんな戦乙女たちそれぞれの表情を見ながら朔真はヴァルトラウテの用意した紅茶へと手を伸ばす。

「さて、どうするか」

紅茶に砂糖を加えながら、朔真はこの後の一件に変化が起きるのを願う様に――

